

第 652 回

日本小児科学会東京都地方会講話会

プロ グ ラ ム

日 時 2019年 2月 9日(土) 午後 2時 00分

場 所 東京医科大学病院本館 6階臨床講堂



次回以降開催予定日

2019年 3月 9日(土) 東京医科大学病院本館 6階臨床講堂

2019年 5月 11日(土) 東京医科大学病院本館 6階臨床講堂

2019年 6月 8日(土) 東京医科大学病院本館 6階臨床講堂

世話人

プログラム係 山西 慎吾
日本医科大学 小児科 03(3822)2131
(FAX) 03(5685)1792

会場係 熊田 篤
東京医科大学 小児科 03(3342)6111
(FAX) 03(3344)0643

事務局 03(5388)7007

e-mail: jpstokyo-office@umin.ac.jp

第 652 回 日本小児科学会東京都地方会講話会演題

(1題6分、指定発言5分、追加討論3分以内、厳守のこと。○印演者)

第1グループ 14:00—14:20

座長 高木 篤史（日本医科大学小児科）

1) 重症新生児仮死による脳幹部低酸素性虚血性障害の1例

○宮崎 萌香、山崎 晋、横倉 友諒、仲川 真由、岩崎 友弘、池野 充、久田 研、
東海林宏道、清水 傑明
(順天堂大学小児科)

重症新生児仮死に対し低体温療法を実施した現在12か月男児。日齢13に施行した頭部MRIで脳幹背側に限局した病変を認め、嚥下・咳嗽・瞬目反射が消失していた。重度の神経学的後遺症が予想されたが、脳幹機能の回復はないものの追視と寝返りを認めている。脳幹部低酸素性虚血性障害の遠隔期の報告は少ないため報告する。

2) 脳梁膨大部病変を認めたムンプス髄膜脳炎の1例

○堀江 未央¹⁾、春日 悠岐¹⁾、呉 英俊¹⁾、石井 大裕¹⁾、西村 佑美¹⁾、小川えりか¹⁾、
高橋 浩樹²⁾、鈴木 潤一¹⁾、石毛 美夏¹⁾、浦上 達彦¹⁾、渕上 達夫¹⁾
(日本大学小児科)¹⁾、(同愛記念病院小児科)²⁾

8歳男児。3週間前にムンプスワクチンを接種した。頭痛・嘔吐と発熱で前医を受診し、無菌性髄膜炎の診断で入院した。同日夜に異常言動がみられ、頭部MRI検査で脳梁膨大部に高信号域を認め、マニトール投与後に症状と所見は改善した。髄液でムンプスPCRが陽性であり、ウイルス分離を提出中である。本症例に文献的考察を加え報告する。

第2グループ 14:20—14:55

座長 渡邊 美砂（東邦大学医療センター大橋病院小児科）

3) 当院救急外来を受診したアナフィラキシー患児の検討

○広村 峻、伊藤 環、森田久美子、高橋 孝雄
(慶應義塾大学小児科)

アナフィラキシー（以下An）は症状が急速に進行し生命を脅かす危険性があるため、迅速かつ適切な対応が求められる。しかし個々の担当医師の裁量により治療が選択されているケースが少なくない。そこでAnを主訴に当院救急外来を受診した患者の受診時の状況や治療について、診療録を用いて後方視的に検討し、文献的考察を加えて報告する。

指定発言 明石 真幸（さいたま市立病院小児科）

4) 顎部リンパ節腫脹を初発症状とした川崎病に3回罹患した男児例

○宮沢光太郎、上村 義季、山田 舞、白井沙良子、土屋 宏人、河原 智樹、周戸 優作、
千葉 瑞希、千葉 悠太、戸張 公貴、小澤 亮、鹿島 京子、勝盛 宏
(河北総合病院小児科)

現在4歳9か月の男児。初回は2歳2か月、2回目は4歳1か月に川崎病を罹患した。3回目は4歳5か月に罹患し、免疫グロブリン2回とステロイドで治癒し、冠動脈病変を残さなかった。3回以上川崎病に罹患した症例は報告が少なく、本症例は3回とも同様の臨床像であったことが特徴的であり、文献的考察を含めて報告する。

5) 腸重積症を契機に診断した回盲部原発非 Hodgkin リンパ腫の 1 例

○福永 遼平¹⁾、植田 高弘¹⁾、板橋 寿和¹⁾、尤 礼佳²⁾、石木 義人²⁾、右田 真¹⁾、前田 美穂¹⁾、伊藤 保彦¹⁾ (日本医科大学小児科)¹⁾、(同 救命救急科)²⁾

15 歳男子。激しい腹痛を主訴に救命救急科に紹介となった。腹部 CT で腸重積症と診断し、非観血的整復術を行ったが解除不能であったため、回盲部切除術を行った。切除部に 75×70mm の充実性腫瘍を認め、病理検査にてびまん性大細胞型 B 細胞性リンパ腫と診断した。腸重積症を呈するリンパ腫について文献的考察を加えて報告する。

休憩 14:55—15:05

感染症だより 15:05—15:25 (講演:15分+質疑応答:5分)

座長 岩田 敏 (国立がん研究センター中央病院感染症部)

砂川 富正 (国立感染症研究所感染症疫学センター)

教育講演 (ii 専門医共通講習) 15:25—16:25 (講演:50分+質疑応答:10分)

座長 平田陽一郎 (東京大学小児科)

院内感染対策の実際 (国内耐性菌の現状と事例紹介)

渡邊 秀裕 (東京医科大学感染制御部)

日本の耐性菌検出頻度は先進諸国に比較して肺炎球菌およびブドウ球菌の耐性率は極めて高く、緑膿菌のカルバペネム耐性率、大腸菌のセファロスボリン耐性率も比較的高い、知らないうちに抗菌薬が効かない菌が周囲に増えてきているのが現状である。基本的なことであるが標準予防策として血液・体液・喀痰・尿・便・膿などは常に感染症の危険があると考えて対応することが重要である。これらの現状と、事例紹介などを行い解説します。

休憩 16:25—16:30

第 3 グループ 16:30—16:55

座長 福岡かほる (東京都立小児総合医療センター感染症科・免疫科)

6) 明らかな外傷なく発症した緑膿菌による踵骨骨髓炎の 1 例

○星名 雄太¹⁾、中尾 寛²⁾、風間麻優子^{1),2)}、吉田美智子³⁾、宮入 烈⁴⁾、窪田 満²⁾、石黒 精¹⁾ (国立成育医療研究センター総合診療部教育研修センター)¹⁾、(同 総合診療部)²⁾、(同 感染防御対策室)³⁾、(同 感染症科)⁴⁾

5 歳男児。左踵骨骨髓炎に対して第 6 病日からセファゾリンを投与したが発熱が断続し、炎症反応の改善に乏しかった。第 20 病日に施行したドレナージ術で踵骨および周囲組織から緑膿菌が検出された。小児における骨髓炎は長管骨に発生し、黄色ブドウ球菌による場合が多い。本例は、部位、起炎菌とも非典型的で、文献的考察を含め報告する。

指定発言 庄司 健介 (国立成育医療研究センター感染症科)

7) 保育園で集団発生した細菌性赤痢

○服部 美来、二瓶 浩一、宇都宮真司、林 歩実、伊藤智恵子、小西 弘恵、中村 浩章、
那須野聖人、清水 教一 (東邦大学医療センター大橋病院小児科)

同じ保育園に通う 5 歳女児と 4 歳男児の *Shigella sonnei* 菌による赤痢患者。女児は 2 度のけいれん、男児は全身状態不良で入院となり、血液検査にて WBC は 2 名とも軽度上昇し左方移動を伴っていたが、男児は CRP やプロカルシトニンも著明に上昇していた。外来で経過観察し得た他の受診患者も含め診療所見を中心に考察する。

第 4 グループ 16:55—17:15

座長 蜂屋 瑞見 (東京都立小児総合医療センター内分泌・代謝科)

8) 早期に遺伝学的診断を行った新生児糖尿病の 1 例

○我有 茉希¹⁾、高澤 啓¹⁾、山内 建¹⁾、大坂 深²⁾、岩田はるか¹⁾、四手井綱則¹⁾、
鹿島田健一¹⁾、今村 公俊²⁾、滝 敦子¹⁾、森尾 友宏¹⁾
(東京医科大学小児科)¹⁾、(土浦協同病院新生児科)²⁾

日齢 7 の女児。在胎 37 週 4 日、出生体重 1966g (-2.4 SD)、身長 41.5cm (-2.7 SD) にて出生。日齢 4 に血糖 426 mg/dL、IRI 3.9 μU/mL を認め、インスリン持続静注が開始となり、日齢 7 に精査加療目的で当科転院となった。インスリンポンプによる治療を開始し、早期に遺伝学的診断を行い、治療方針を決定した。治療および診断の経過を報告する。

9) 当院における小児 Basedow 病に対する甲状腺全摘出術後の副甲状腺機能低下症の検討

○笹本 武明、熊田 篤、齋藤 直子、赤松 信子、三浦 太郎、河島 尚志
(東京医科大学小児科)

甲状腺全摘出術後の副甲状腺機能低下症は一般的合併症の 1 つである。成人での甲状腺術後副甲状腺機能低下症の頻度は、一過性 7 ~ 46%、永久性 1 ~ 4.7% と言われている。小児は成人に比べ高頻度となるが、レポートは少なく明確な頻度やリスクは不明である。今回我々は小児 Basedow 病 8 例を用いて、甲状腺全摘出術後副甲状腺機能低下症の臨床経過を検討した。

【運営委員会だより】

1. 第 652 回講話会（2019 年 2 月 9 日）のプログラム編成について報告がありました。
2. 第 652・653 回講話会の教育講演および感染症だよりについて、講師と座長が確認されました。
3. 次期会長として日本医科大学伊藤保彦先生が推薦されました。
4. 2019 年度名誉会員として星加明徳先生と大澤眞木子先生が推薦されました。
5. 2018 年 12 月末で 3 年未納の自動退会の対象者は 55 名であることが報告されました。
6. 幹事会議案と 2018 年度決算、2019 年度予算について確認されました。
7. 来年度の教育講演の座長の確認が行われました。
8. 次期プログラム委員は、日本大学小児科（5～7 月）にご担当頂くことになりました。
9. 東京都地方会で作成する「緊急時を念頭にしたメーリングリスト」について、これまでに 673 名（全会員の約 30%）の登録があったことが報告されました。
10. 第 651 回講話会（1 月）の出席者は 262 名、ベビーシッタールーム利用者は 3 名、前回講話会以降の新入会者 15 名、退会者は 10 名でした。

【演題の申し込みについてのお願い】

- ・ 動画が含まれる場合には、その旨を明示して下さい。
- ・ 原則として指定発言をつけて下さい。（共同演者から指定発言は頂けません）
- ・ 演題の締切は次のようになります。
- ・ 運営委員会にて抄録の修正をさせて頂く事もございますので、原則としてご了承下さい。

講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切	講話会開催月	演題締切
1月	前年 11 月 30 日	2月	前年 12 月 25 日	3月	1月 31 日
5月	2月 28 日	6月	4 月 30 日	7月	5 月 31 日
9月	6 月 30 日	10月	8 月 31 日	12月	9 月 30 日

申込演題が規定数を上回った場合、さらに 1 回先になることがありますのでご了承下さい。

その場合、事務局よりご連絡します。

【演者の先生方へのお願い】

- ・ 一次抄録は 160 字以内に。また、二次抄録は日本小児科学会雑誌に掲載されますので規定の 200 字以内を厳守くださいようお願い致します。(原稿はワード入力で e-mail にて事務局へお送り下さい。)
- ・ 出席した会員に発表の意味をより強く、明確に伝えるために、最後(または適切な時期)に Take Home Message (この発表から学ぶこと) を手短な一文で記したスライドを付け加えていただくようお願い致します。

【会員登録事項の変更届についてのお願い】

- ・ 自宅、勤務先の住所（プログラム送付先）等の変更または、改姓があった場合は、速やかに東京都地方会事務局までご連絡下さい。
- ・ 退会される場合も必ずご連絡下さい。そのお届けがない場合は次年度も継続として年会費の請求を致します。
東京都地方会事務局 e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp / FAX : 03 (5388) 5193

【事務局よりご連絡】

- ・ 今回の教育講演には日本小児科学会専門医新制度における専門医共通講習の単位が付与されています。受付開始から教育講演開始まで引換券を配布しますので、教育講演終了後から講話会終了までの間に引換券と単位認定証とを交換して下さい。
なお、引換券は当日限り有効です。
また教育講演開始後に入場、及び終了前に退出された方には専門医共通講習単位はお渡しできません。
- ・ こどもの健康週間パンフレットは 2016 年版と 2017 年版も在庫がございます。ご希望の先生は事務局までご連絡下さい。なお在庫の関係でご希望部数をお送り出来ない場合がございますことをご了承下さい。

Presentationについて

発表は Computer Presentation (Windowsのみ可、Macは不可) のみで受け付けます。MacのPC持ち込みによる発表はご遠慮下さい。Powerpoint 2000以上で作成、Font 文字は Powerpoint 備え付けのみ。CD-R もしくは USB メモリーにて、第1、2 グループ発表者は午後1時30分までに、第3 グループ以降の発表者は午後3時までにスライド受付まで持参して下さい。機器操作は、当方で行います。あらかじめウイルス check をお願い致します。

動画について

動画の発表にはトラブルが多いため、下記の方針をご理解いただきますようお願い致します。

- ① 一般演題での動画の使用はできる限りお控えいただくようにお願い致します。
- ② 動画の使用が不可避と考えられる場合、ファイルのセーブ法などの注意事項がありますので、学会事務局に必ず事前にご連絡下さい。
- ③ ②の場合にも、動画の映写にトラブルがあったときに備え、静止画像のみで構成された代替パワーポイントファイルをご用意下さい。当日、動画の映写が不可能と判断された場合には、代替パワーポイントファイルを用いて、時間通りに学会を進行させていただきますことをご了承下さい。

〈ベビーシッタールーム開設のお知らせ〉

乳幼児を同伴される方のために、ベビーシッタールームを開設します。利用ご希望の方は、利用日の**10日前**までに問診票をダウンロードし、必要事項を記載の上、事務局へe-mailまたはFAXでお申し込み下さい。問診票は東京都地方会ホームページにございます。利用当日、お子様が好きな食べもの・飲料・おもちゃ・着替え・おむつなどに名前を付けてご持参下さい。キャンセルされる場合は、3日前までにご連絡をお願い致します。連絡のないキャンセルの場合は、次回以降の利用をご遠慮頂く場合がございます。なお費用は学会が負担致します。

日本小児科学会東京都地方会事務局 TEL 03-5388-7007/FAX 03-5388-5193
e-mail : jpstokyo-office@umin.ac.jp

症例・研究を発表してみませんか

— 小児科専門医を目指す方へ —

ご投稿をお待ちしております

小児科臨床では、投稿いただきました論文には必ず査読が入ります。投稿規定の詳細は弊社ホームページをご覧ください。



編集委員

今井孝成・浦島崇・小林正久・鈴木光幸・
田中恭子・長谷川大輔・張田豊・堀越裕歩

(第 71 卷)

12号 特集

抗菌薬の適正使用と
院内感染対策について考える

増刊号

よくある疾患の診かた
—他科からの助言—

5号 特集

私の処方 2018

小児科臨床
Japanese Journal of Pediatrics

特集
抗菌薬の適正使用と
院内感染対策について考える



(第 70 卷)

6号 特集

ここがポイント
小児診療ガイドラインの使い方

日本小児医事出版社



株式会社 日本小児医事出版社

〒160-8306 東京都新宿区西新宿 5-25-11 TEL 03-5388-5195 FAX 03-5388-5193